

ポーランド プウォツク配属先冬合宿

2010年9月17日付けの本ホームページではポーランドの配属先のひとつ「プウォツクの子どもたち」の夏合宿をご紹介しました。日本文化発信プログラムで派遣されたボランティアは2月末に全員が帰国し、今回の記事をもって**イベント紹介**は最後となりますが、その締めくくりとして、2月14～20日まで行われた「プウォツクの子どもたち」の冬合宿の様子をお伝えします。

夏は2週間、冬は1週間の予定で行われる合宿ですが、今年の冬合宿はポーランド北部の美しいお城があるグニエフという街で行われました。舞踊や合唱のレッスンを中心に、雪遊びや救急訓練なども盛り込まれた充実した内容の合宿です。ボランティアは90名の参加者の引率に同行。寝食を共にし、生活の補助、体調を崩した子どものケアなども業務として行いながら、スケジュールにしたがって毎日日本文化のワークショップを実施しました。



外気温は零下の中で
キャンプファイヤー

ボランティアは文化紹介として、小グループに分けた配属先の子どもたちに「書道」、「折り紙」、「割り箸鉄砲づくり」を指導しました。ボランティアはこれまで数回合宿を経験していますが、その都度テーマを決めて趣向をこらし、新しい工夫を織り交ぜて臨むので、子どもたちもボランティアの日本文化講座をととても楽しみにしています。

「折り紙」は子どもたちもずいぶん慣れてきたので、今回は数枚から数十枚を組み合わせて作る難しい作品にも挑戦。少し手間はかかるものの、見応えのあるものや豪華なものにチャレンジした子どもたちは、できあがった時の達成感もひとしおだったようです。「割り箸鉄砲」は割り箸の数が足りなかったのが残念くらい大人気で、特に男の子たちは的を目掛けての射撃ゲームにみんな夢中になりました。「書道」は自分たちが書きたい言葉を書くという作業にしたことで、とても熱心にそして真剣に取り組む姿が見られました。子どもたちの好きな言葉を聞いて一人一人にお手本を書いてあげるボランティアのきめ細やかな対応と心のこもった指導には改めて敬服させられます。



書道に取り組む子どもたち

2年間、現地の人たちと本当に温かい交流を続けたボランティアでしたが、この合宿が最後の日本文化紹介活動となりました。日本の魅力を伝え、日本文化に興味を持ってもらうことに大いに貢献したボランティアの帰国を惜しむ声も多く、お別れにはこれまでの感謝の気持ちを込めてオーダーメイドの民族衣装がプレゼントされました。



配属先と子どもたちから
プレゼントされた民族衣装

素晴らしい発信力、心が通じた交流、双方にとって貴重な体験…、本プログラムの主旨である草の根活動の代表例といえるでしょう。2011年2月27日の帰国日には赴任地から配属先が手配したバスが出て、空港ではプウォツクの人たち総勢50名がボランティアの功績を称え、その姿が見えなくなるまで見送りました。



ワルシャワ空港にて。
お見送りに来た配属先関係者と
手作りの旗には「ありがとう」と日本語で

次回の記事では2年間のプログラムのイベントをとりまとめます。